

優れた芸術の魅力を伝えるとともに、独自のコレクションを後世に伝える

要求水準－収集・保存

収集方針に基づき資料を収集し、適切な保存・管理を行う

評価項目

- (1) 本県出身の作家を中心として、特色ある資料の充実に努める
- (2) 資料の整理・分類、点検・劣化防止等の処置を適切に行う

状況説明

- (1)本県出身の作家を中心として、特色ある資料の充実に努める
 - ・福森白洋をはじめ、中林忠良等の作品13点(評価額 4,620 千円)の寄贈を受けた。
- (2)資料の整理・分類、点検・劣化防止等の処置を適切に行う
 - ・美術作品・資料は、収蔵庫に保管し、24 時間空調による温湿度管理の下で適正に保存管理するとともに、震災時に作品がそのまま落下しないよう耐震化対策を取っている。
 - ・貸出し依頼のあった作品のコンディション・チェックを行い、状態に合わせた適切な対応を行っている。
 - ・石元泰博フォトセンターについては、プリント、フィルムをそれぞれの素材に適した温湿度設定がなされた環境下で保存。また、整理した石元泰博作品の画像を情報コーナーの端末 PC 上で公開した。
 - ・展示室は 24 時間監視カメラ及び警報システムによる警備を行い、展示室入り口には受付スタッフ及び監視員を配置し、展示作品の安全を保っている。
 - ・IPM の一環として、展示室内で虫が見つかった場合は、捕獲してその種別を確認したうえで、発生日時を記録し、害虫防除に努めた。
 - ・書庫・アート情報コーナーでは、休館中に解説補助員の助力を得て、高知市の映画研究家、星加敏文氏から寄贈を受けた映画関連資料(星加コレクション)の整理を行い、総計2万8千点を超えるコレクションを分類・撮影した。
 - ・絵具層に剥落が見られるなど状態が悪い油彩画 5 点の修復を専門の修復家に委託し、作品の状態を安定化させた。
 - ・エントランスに展示されていたフランク・ステラの大型レリーフ作品を、吊り天井耐震工事の際に、専門業者に委託して修復した。
 - ・石元泰博フォトセンター、展示室、書庫、アート情報センターは、吊り天井改修工事のため、工事期間中(H31.4～R1.12)は立ち入り禁止であった。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・収集方針に則り、本県ゆかりの作家の代表的作品を数多く収集することができる。 ・収蔵庫の保存環境保全に努め、適切な方法で収蔵資料を保管するとともに防犯セキュリティ面でも収蔵庫、展示室等の安全を保っているほか、休館を利用した資料整理や修復を行うことができる。

要求水準一調査・研究

収蔵資料の調査研究を進め、その成果を公開する

評価項目

- (1) 職員の専門性の向上を図るとともに、調査研究の成果を、資料の公開や図録・記録集の作成等により、広く発信する
- (2) 石元泰博コレクションの調査・研究を進めるとともに、作品の情報を発信し、適切な利活用を図る

状況説明

(1) 職員の専門性の向上を図るとともに、調査研究の成果を、資料の公開や図録・記録集の作成等により、広く発信する

- ・各学芸員が全国美術館会議の保存研究部会、教育普及部会、地域美術研究部会、情報資料研究部会、美術館運営制度研究部会にメンバーとして参加し、専門性を向上させた。
- ・文化庁の主宰するキュレーター研修に学芸員一名が参加し、東京国立近代美術館での2か月の研修を受け、新たな調査・研究テーマを探った。
- ・三重県、愛知県の博物館施設に視察を行い、美術館の地震対策についての知見を深めた。
- ・県立坂本龍馬記念館及び県立歴史民俗資料館の学芸員と当館寄託資料「河田小龍日記」を解読。
- ・高知県ゆかりの作家(中山高陽、河田小龍、など)の作品を中心に、県内外問わず作品調査を行った。
- ・当館ホール担当職員が、財団本部主催の自主企画研修を活用してイタリアのトリノダンツァ・フェスティバルへ視察に出向き、当年度の公演事業「ピーピング・トム」の特徴である現地シニアキャストを取り入れて作品化する社会的な効果に学び、今後の企画構想のための研修を実施した。
- ・当館ホール担当職員が、オーストラリアで開催された APAM 国際舞台芸術見本市に招かれ、公演視察のほかアーティストらによるプレゼンテーションへの参加や、参加するプロフェッショナルらとの交流を経て、協働の可能性やネットワーク構築に努めた。
- ・ホール担当職員が、全国コミュニティシネマ会議 2019 に出席し、全国の映画館・公共ホールでの上映会などの動向を情報収集し、定期上映会に活かした。
- ・「出張プロジェクト」のうち、中土佐町立美術館、芸西村筒井美術館、四万十町立美術館で行った4つの展覧会において、作品解説の執筆を当館学芸員で行い、作品について現在の知見を発表。
- ・令和元年10月に美術館「えき」KYOTO より立ち上がり、当館では令和2年5月末から7月にかけて開催する企画展「西洋近代美術にみる神話の世界」展の図録の原稿を当館学芸員2名が執筆した。

(2) 石元泰博コレクションの調査・研究を進めるとともに、作品の情報を発信し、適切な利活用を図る
1)「深める」活動

- ・寄贈資料(小物類、調度品など)の内容確認と調査を進め、今後の整理方法の検討、包材の取り換え、目録化、コレクション展での展示公開などを行った。
- ・写真プリントの保存環境改善のため、収蔵庫の棚移動や保存箱の分割を行った。
- ・石元の生前実施されたインタビュー音源のデジタル化と音声反訳を行い、テキストデータを作成した。
- ・アーカイブズ・カレッジ、アーカイブ保存修復研修に参加。
- ・プリント作品および収納箱に関するデータを統合し、クラウドデータベースへ一括移行、今後の作品情報管理のための大規模なインフラ整備を行った。(総レコード数:41,689件)
- ・石元旧蔵図書の書誌情報をクラウドデータベースに一括移行し、館蔵図書データベースとの統合を行った。(総レコード数 5,294件)
- ・プロカメラマンに委託してプリント作品155枚を複写、貴重本1冊を撮影し、高精細画像を作成した。
- ・保管庫で管理しているフィルム1,080スリーブ(2,610コマ)のデジタル化及び包材の取り換えを行い、データベース(ファイルメーカー)に追加、その内容は外部研究者に一部公開した。
- ・保管庫で保管している全てのフィルムの棚卸作業を行い、フォーマットや箱書き、保存箱等の情報のデータベース化を行なった。
- ・美術館連絡協議会の研究助成により、石元が暮らしたアメリカ・シカゴを訪問。現地にて、石元関係各

所とのネットワーク構築、石元作品の収蔵状況、アーカイブ資料等の調査、旧居住地、撮影地等のゆかりの地調査を行なった。

- ・日本カメラ博物館の学芸員を招聘し、石元旧蔵の撮影機材の調査と目録化を行なった。
- ・遺族より新たに多数の関連資料を借用し、内容確認と調査を行うとともに目録化して正式な寄贈に繋がった。また、1930～40年代の寄書き帳を翻刻し、テキストデータを作成した。
- ・国立国際美術館を訪問し、所蔵作品である「曼荼羅」の調査を行なった。
- ・ラ・バル、武蔵野美術大学大辻清司アーカイブ、東京都写真美術館、東京オペラシティ アートギャラリー、京都府京都文化博物館からの調査を受け入れ、石元コレクションやフォトセンター施設の公開などの調査協力を行うとともに、意見交換を通じてネットワーク構築を図った。
- ・日本写真家協会、武蔵野美術大学大辻清司アーカイブ、県立牧野植物園、京都大学研究資源アーカイブ、上田市立美術館を訪問し、施設の視察やヒアリング調査を行った。
- ・建築雑誌への掲載状況や当館所蔵のネガフィルムを調査のうえ、石元が建築物を撮影している建築家事務所や建設業者向けにアンケートを実施した。そのうち、武蔵野美術大学図書館・美術館、磯崎新アトリエ、竹中工務店を実際に訪問し、所蔵資料の調査を行なった。
- ・カタログ・レゾネに関する国際シンポジウムを聴講し、石元レゾネ編纂に向けて情報収集を行なった。
- ・石元作品の掲載文献目録編纂のために情報の収集と整理を進め、貴重書を中心に雑誌や一般書籍の収集を行った。

2)「広める」活動

- ・令和2年度に開催する石元生誕 100 周年展へ向け、美術館連絡協議会に企画提案を行うとともに、各関係先と協議調整を進めた。
- ・コレクション展として、「包まれた食物」、「両界曼荼羅」をテーマに、合計 55 点の作品・関連資料を紹介
- ・国東市歴史体験学習館にて石元作品のパネル展示を行ない、当館学芸員がギャラリートークを実施。
- ・1950年代展研究会に参加し、シカゴ調査と50年代の石元についての研究発表を行った。
- ・アート・ドキュメンテーション学会に参加し、フォトセンターの活動について紹介するポスター発表を実施
- ・全国美術館会議の資料・情報研究部会に部員として参加するほか、アーカイブズ資料所蔵調査では石元資料に関する情報提供を行った。
- ・著作権の利活用取扱業務として、国内外からの相談など 33 件に対応し、28 件の利用につなげた。

3)「つなぐ」活動

- ・土佐市の地域祭「山の手ふれあいフェスティバル」にブース出展し、スライドショーやゲーム等を通じてフォトセンターの広報活動を行った。
- ・高知市立一宮中学校の「校内ハローワーク」にてレクチャーを行い、フォトセンターについて紹介した。
- ・日本写真芸術学会会報誌へ寄稿しフォトセンターについて紹介した。
- ・専用ウェブサイトと SNS において、各コレクション展の情報発信のほか、昨年度実施した内藤廣氏ほかによる講演録の掲載などを行った。
- ・専用ウェブサイトがより使いやすくなるよう、レイアウト変更などメンテナンスを行った。
- ・館内音声ガイドで石元泰博展示室について紹介するコンテンツを作成、公開した。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・休館の機会を利用して、日頃は行いにくい県外調査や県外研修会への参加等に取り組むことができている。 ・ホール事業では、担当者の専門性の向上を図っており、また海外アーティストのレジデンス招聘や交流など活発な活動につながっている。 ・石元泰博フォトセンターでは、コレクション作品の調査研究を進めているほか、氏の故郷である土佐市の教育委員会と連携に引き続き取り組むとともに、データベースにかかる整備を行ったり、作品の借用申請等を通じて国内外の美術館等と連携を深め、作品を広く紹介するなど、情報発信と利活用促進の活動ができている。

要求水準－展示・公開

質の高い、優れた芸術に触れる機会を提供し、芸術や文化に対する関心を深める

評価項目

- (1) シャガール、石元泰博の二大コレクションの展示など、質の高い魅力的な常設展・企画展を開催し、5年間で21万人以上の観覧者を目指す
- (2) ホールの特性を生かした事業を実施し、美術館の魅力向上に努める
- (3) 講演会やギャラリートークの実施など、来館者の芸術や文化への理解を深めるためのサービスを充実させる

状況説明

(1) 世界有数のシャガールコレクションの展示など、質の高い魅力的な常設展・企画展を開催し、5年間で21万人以上の観覧者を目指す

① 県美コレクション出張プロジェクト(総出品数 67点)

- ・休館中、「県美コレクション出張プロジェクト」として、香美市立美術館、四万十町立美術館、中土佐町立美術館、芸西村筒井美術館の4館に所蔵作品を貸し出して計6回の共催展を開催。
- ・ギャラリートーク等に学芸員を派遣することで、各館との連携・交流を深めた。
- ・作品の貸出にあたり、当館の学芸員が貸出先の展示室や収蔵庫での保管・展示環境の改善について指導を行い、各館の作品の取り扱いに関する意識向上に寄与した。

② シャガール・コレクション展(総出品数 61点)

- ・当館のコレクションから、「天と地」というテーマで、単品版画を2回に分けて紹介した。

③ 石元泰博・コレクション展(総出品数 55点)

- ・当館のコレクションから、「包まれた食物」、「曼荼羅」をテーマに、石元作品を2回に分けて紹介した。

2) 企画展として、以下の展覧会を開催した。

① 「ぼくとわたしとみんなの tupera tupera 絵本の世界展」《巡回展》(総出品数 約300点)

- ・絵本をはじめとするモノづくりの軌跡をたどる初めての大規模な展覧会。代表作の絵本の原画を中心に、立体作品やイラストレーション、映像作品などを紹介。

(2) ホールの特性を生かした事業を実施し、美術館の魅力向上に努める

① 大谷康子&イタマール・ゴラン デュオ・リサイタル(1公演)

- ・日本を代表し、高知県にもゆかりのヴァイオリニストと世界的に著名なピアニストとのデュオ・リサイタル

② 青木涼子「能オペラAOI 葵」日本初演 美術館能楽堂(1公演)

- ・源氏物語「葵の巻」を基にした能「葵上」を題材に、能と現代音楽とアートが融合した新たな形の“能オペラ”を制作し、上演。公演に先立ち、青木による能の歴史や本公演についてのレクチャーも開催。独自性のある公演になったとともに、日本の伝統文化に親しんでもらう貴重な機会となった。

③ 座・高円寺レパートリー「ピン・ポン」(企画展関連公演(2公演))

- ・リズムカルな歌、コミカルなパフォーマンスなど、さまざまな要素が絡み合った子供向けの公演

④ アーティスト・イン・レジデンス 2019「イン・トランジション」(日本×タイ)

- ・タイ、日本からアーティストを招き、リサーチに特化したレジデンス事業を実施。地域で活動するアーティストや伝統芸能の担い手等とのネットワークを活かし、リサーチを介して地域の再発見、再配信を図る

⑤ 地域のアトリエ #02 石神夏希「場所から『つくる』をはじめ」(高知城歴史博物館 2日間)

- ・美術館をアトリエに見立て、地域のアーティストと観客が高知での次世代のアートの可能性を考察するセミナーとして、高知城下のまちを舞台に、場所から物語を生み出すアートプロジェクトを体験するワークショップとトークを、劇作家の石神夏希を講師に迎え実施した。

⑥ 津野山古式神楽を舞う

- ・高知県高岡郡津野町に伝承されている津野山古式神楽を、能楽堂を舞台に上演した。

⑦ ピーピング・トム「マザー」公演(コロナウィルス感染拡大防止のため公演中止(1公演予定))

- ・ベルギーのダンスを牽引するピーピング・トムの家族三部作より「マザー」の日本公演。公演に先駆け美術館内のシアタールームにて、関連ドキュメンタリー上映会と、現地シニアキャストの募集と選出を行

ったが、新型コロナウイルスの感染拡大の防止のため、公演中止となった。

⑧出前クラシック教室(6校8回)

・県内の小中学校などに出向き、音楽交流を行った。また実施回数は通算100回を超えた。

⑨出前演劇教室 コロナウイルス感染拡大防止のため中止(3校3回予定)

⑩定期上映会(春夏秋冬)12日間計24本上映

・春は映画大国イタリアの娯楽映画、夏は日本の怪奇作品、秋はフランスの幻の作家の監督作、冬は日本映画の巨匠木下恵介監督作と多様な作品を上映出来た。

⑪共催事業(8事業)

(3)講演会やギャラリートークの実施など、来館者の芸術や文化への理解を深めるためのサービスを充実させる

1)ギャラリートーク(総回数18回、総参加者数103人)

・シャガール・コレクション展(毎週土・日曜日):作家解説を主体としたミニ・トークを実施

・石元泰博・コレクション展(毎週土曜日):作品解説会を新たに開始

・企画展:手話通訳や英語通訳付きを含め、担当学芸員によるギャラリートークを4回実施

・「ぼくとわたしと みんなの tupera tupera 絵本の世界展」では、作家によるギャラリートークも企画するなか、印刷では分からない手作業による原画の魅力や、モノづくりの楽しさが伝わるよう紹介した。

2)講演会等

・「ぼくとわたしと みんなの tupera tupera 絵本の世界展」では、アーティスト・トークを実施。

3)展覧会等関連イベント、ワークショップ

・「ぼくとわたしと みんなの tupera tupera 絵本の世界展」では、プレイベントとして舞台公演「ピン・ボン」を上演し、会期中には作家による読み聞かせイベント「絵本ライブ」やサイン会を実施した。

・「青木涼子「能オペラ AOI 葵」では、事前レクチャーや終演後のアフタートークを行った。

・「地域のアトリエ」#02 石神夏希「場所から『つくる』をはじめる」では2日間にわたり高知城歴史博物館の周辺地域に繰り出し、場所から「物語」を生み出すアートプロジェクトの過程を体験するワークショップを実施した。2日目には「アートプロジェクト」の事例紹介のトークを実施した。

・アーティスト・イン・レジデンス2019では、作曲家の宮内康乃による声のワークショップを春野東小学校の5年生を対象に実施した。また地域のアートNPOと連携したトークを実施した。

・「ピーピング・トム」公演では、関連ドキュメンタリー映画の上映会をシアタールームにて行った。

・「ピーピング・トム」公演の現地シニアキャストの公募を行い、出演者選出を行った。(新型コロナウイルスの感染拡大の防止措置の為、公演中止となり実現には至らなかった)

評価	理由
A	・「出張プロジェクト」では、美術館では展示する機会の少ない作品を紹介することができた。 ・企画展やホール公演と連動した講演会、ワークショップやギャラリートークなどイベントの多角的、多面的な理解を促進する取り組みが行われている。 ・世界の舞台芸術の招聘や情報発信、アーティスト・イン・レジデンス事業を通じたアーティストと県民の交流など美術館ホールが長年の活動で培ってきた成果が表れている。

要求水準－教育・普及

様々な年代を対象とした教育・普及活動を行う

評価項目

- (1) 学校や関係機関と連携を図り、子どもたちの芸術や文化に触れる機会を充実させる
- (2) 幅広い年代の方に、芸術や文化に親しむ機会を提供する

状況説明

(1)学校や関係機関と連携を図り、子どもたちの芸術や文化に触れる機会を充実させる
休館に伴い、「スクール・プログラム」はアウトリーチ活動を中心に実施

- ・団体利用(合計5校 487人)
- ・ミュージアムバスツアー(休館のため中止)
- ・出前びじゅつ講座(14校 762人)
- ・出前クラシック教室(6校 240人)
- ・出前演劇教室(3校 3回予定だったが、コロナウイルス感染拡大防止のため中止)
- ・ティーチャーズ・ウィークの実施
- ・中学校の職場体験学習(休館のため中止)

(2)幅広い年代の方に、芸術や文化に親しむ機会を提供する

1)お正月イベント(1月2、3日)

- ・和洋楽器のコラボによる新春演奏会や、「津野山古式神楽」をホール能楽堂で無料上演

2)企画展関連イベント

- ・企画展関連イベントとして実施した舞台公演「ピン・ポン」をはじめ、書店での記念サイン会、作家による絵本ライブ、サイン会、アーティスト・トークには、県内外から子どもを中心に、幅広い年代の方が来場。

3)ホール事業関連イベント

- ・「能オペラ AOI 葵」公演のプレイベントとして、出演者・青木涼子による『能』のレクチャーを行った。
- ・「ピーピング・トム」公演に関連したドキュメンタリー映画の無料上映会を開催した。

4)創作支援

- ・県民の方の芸術文化活動の発表の場として県民ギャラリー、美術館ホール等の貸し出しを行った。新型コロナウイルス感染拡大防止のため多くの利用が中止。
(県民ギャラリー・企画展示室の利用実績:10件、美術館ホール:504件)

5)無料託児サービス

- ・企画展、ホール公演時に有資格者による無料の託児サービスを実施した。

6)カルチャーサポーターとの協働

- ・資料の整理や発送をはじめ、イベント、団体対応、ミュージアム・クルーズなど、多様な活動をカルチャーサポーターと協働して円滑に進めた。また、企画展関連イベントとして行った体験コーナーでは、参加者のサポートを担当してもらった。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none">・コロナウイルス感染拡大防止のため中止した活動があったものの、スクール・プログラムを継続的に実施し、子どもたちが芸術や文化に触れる機会を創出している。・幅広い層の利用者ニーズに合う企画展や公演、その他事業を創意工夫して企画し、県内外から新しい来場者層の獲得を図っている。・お正月のイベントを充実することにより、リピーターを含め、幅広い層に対して美術館に親しんでもらう機会を提供出来ている。・カルチャーサポーターと協働して活動を行い、芸術や文化に親しむ機会を提供するとともに、県民の美術館への理解を深めるよう努力している。

評価項目

美術館活動に関する戦略的な情報発信により、県内外に館の魅力を広める

状況説明

- ・休館中の取り組みも積極的に発信し、継続的に情報を提供した。
 - ・広報会議においてスケジュールの管理や具体的な取り組みを検討しながら、広報部会や館会議で広報の取組状況を共有し、成果や改善策を協議した。
 - ・県内外のマスコミに活動情報を速やかに提供し、記事の掲載につなげた。
 - ・「年間スケジュール」は、各事業のヴィジュアルを使用しながら、休館中の活動予定も掲載。
 - ・定期行物「ケンビレーター」は休館を機にリニューアルを行い、イメージを刷新。展覧会やホール公演の見どころ等に加え、終了したイベントの報告を載せ、興味を持てる内容になるよう工夫した。
 - ・シャガールと石元泰博のコレクション展を紹介するリーフレットは、様式デザインを「対」にすることで、二大コレクションのイメージを強く打ち出した。
 - ・イベントなどのきめ細やかな情報発信のため、フェイスブック、ツイッター等、SNSを積極的に活用した。
 - ・各事業での重点的な取り組み
- ①企画展では、展覧会の3か月以上前からステッカーを作成し、事前の告知に努めた。絵本を扱う書店との連携を積極的に行い、書店においてポスターやチラシを設置するなどコーナーの展開を行った。
 - ②「県美コレクション出張プロジェクト」では、統一したデザイン・ロゴを展開し、シリーズであることを強調
 - ③「大谷康子&イタマール・ゴラン デュオ・リサイタル」では、高知県にゆかりのある大谷康子が事前に来高し、新聞取材やラジオ出演、知事への表敬訪問など、積極的に広報活動を行い、満席となった。
 - ④「能オペラ AOI 葵」では、事前レクチャーや、SNS、メディア掲載などにより、幅広い層に対し広報。高校生を公演に招待したことで、一流の出演者による舞台を鑑賞する機会となり、育成にも繋がった。
 - ⑤座・高円寺レパートリー「ピン・ポン」では、チラシ等印刷物を作成し、幼稚園などにも広く広報を実施。
 - ⑥アーティスト・イン・レジデンス 2019「イン・トランジション」では、地域のアートNPO や書店と連携したレジデンスアーティストによるトークイベントや、小学校でのワークショップ等を行った。
 - ⑦「地域のアトリエ」では、レジデンス事業の実施と同時期に高知のアートシーンを調査する機会を設け、地域で活動するアーティスト等と直接意見交換を図り、企画実施時の広報活動にも繋がられた。
 - ⑧「津野山古式神楽を舞う」は、3年間継続して県内の神楽を紹介したことにより、常連の観客が増え、お正月イベントとしての定着に繋がった。
 - ⑨ピーピング・トム「マザー」公演では、同カンパニーの舞台裏を追ったドキュメンタリー映画の上映会を実施。その時期をシニアキャストの募集期間、オールドパワー展の会期と合わせ、地域の高齢者層から関心を引き出すことを狙った。
- 4)その他
- ・開館記念日イベントでは、「サイ(祭、防災、野菜)」というテーマを定め、プログラムを充実させた。
 - ・再開した1月2日には「お正月イベント」として神楽やポストカードの配布を行い、来館者増に努めた。

評価	理由
A	・休館中の活動についても、積極的広報戦略を行うとともに、SNSも活用した効果的な情報発信が来ている。

評価項目

県内外の他の博物館等と連携した事業の充実により、県民サービスの向上を図る

状況説明

1) 展覧会における連携

・「県美コレクション出張プロジェクト」では、香美市立美術館の「比べる楽しみ・対話する絵画」に3点、「第85回企画展 美術の森へようこそ」に4点、中土佐町立美術館「山本倉丘・生命の造形」展に11点、「高知県展萌芽の時代」展に17点、芸西村筒井美術館「筒井広道・里帰り展 VOL.2」に7点、四万十町立美術館「高知県立美術館洋画名品展」に18点の作品を貸し出した。

2) ホール事業における連携

・「ピーピング・トム」公演は、世田谷パブリックシアター（東京）との共同招聘事業として実施し、制作面・広報面の連携を強化して実施することができた。

・「地域のアトリエ#02」の街を舞台にしたアートプロジェクトのワークショップとトークを実施をするため、拠点を高知城歴史博物館に置くことで普段、美術館の事業に触れることの少ない幅広い客層にアプローチすることができた。

・「アーティスト・イン・レジデンス 2019」では、地域のNPO 団体及び蔦屋書店と連携し、レジデンス事業に招いた作曲家によるトークを行い、活動紹介とレジデンス事業を通じたリサーチの目的をアーティスト自ら語る機会を創出した。

・「夏の定期上映会」は、県立歴史民俗資料館の企画展「昭和から平成へーくらしのうつりかわりー」展の関連イベントとして開催し、相互割引と広報協力を行うことで相乗効果のある連携となった。

・高知県立歴史民俗資料館の「れきみん！ サマーミュージアム プレイバック昭和となつこのども」の催しのひとつとして、当館で「ゴー！ ゴー！ うちわ」という子どもや親子連れを対象とした企画を実施。

3) 所蔵作品の貸出

・県外では、「没後100年 岡崎が生んだ天才 村山槐多展」(おかざき世界子ども美術博物館／上田市立美術館)に1点、「黄昏の絵画たち 近代絵画に描かれた夕日・夕景」(山梨県立美術館／島根県立美術館／神戸市立小磯記念美術館)に2点(2点とも高知市の寄託作品)、「Basquiat-made in Japan」(森アーツセンターギャラリー)に1点の作品を貸し出した。

・県内では、「平成31年度ミニ企画 vol.4「曾我兄弟」」(絵金蔵)に1点の作品を貸し出した。

4) 県内外とのネットワーク

・県内では、こうちミュージアムネットワークに参加した。

・県外では、全国美術館会議、日本博物館協会、美術館連絡協議会、公立文化施設協議会、コミュニティシネマセンター、ジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク、劇場・音楽堂等連絡協議会、四国美術館会議、四国博物館協議会、中四国地区公立文化施設協会に加盟し、各種の会合への参加を通じて職員の専門知識の向上を図り、日常業務へ還元する努力をしている。

・「ふるさとの海・川・魚 西岡瑞穂の軌跡展」(安田まちなみ交流館・和)の関連イベントとして、学芸員を派遣し講演会を行った。

・「志士の肖像 一公文菊僊と龍馬を描いた絵師たち」(高知県立坂本龍馬記念館)の関連イベントとして、学芸員を派遣し講演会を行った。

5) 委員就任等

・高知県芸術祭執行委員会、高知市文化財保護審議会、高知市史編さん委員会専門部会、中土佐町立新美術館基本構想策定委員会の委員を務めた。

・赤岡町の絵金祭りに職員を派遣し、作品解説を行った。

6)市町村やNPOに対する支援

- ・四万十川国際音楽祭や演劇祭 KOCHI、シネマの食堂といった優れた活動を引き続き支援した。

評価	理由
A	・「出張プロジェクトでは、」収蔵作品を地域へ広めるとともに、県内の施設との連携・交流を深めることができたほか、所蔵作品の貸し出し等を通じて、作品の魅力の魅力発信や県内外の他施設にも貢献していることが認められる。 ・地域による活動への支援を通じ、県民にその成果を還元することができたと認められる。

要求水準－施設管理

施設及び設備の適切な保守管理をとおして、故障や事故のない運営を行う

評価項目

(1)適切な管理運営の確保	社会的責任	・法令等の遵守 ・個人情報、情報公開の状況
	建物や設備の管理	・点検、修繕の実績 ・業務委託の状況
	危機管理	・風水害、火災、地震、盗難等危機管理対策 ・マニュアルの作成 ・職員研修

状況説明

1)社会的責任
 ・高知県立美術館の設置及び管理に関する条例や指定管理に関する協定等に基づき、適切な施設の管理運営に努めるとともに、専門業者へ委託した業務に関しても関連法規に沿った施設管理を徹底。
 ・個人情報については、高知県文化財団個人情報保護規程に基づき、収集、利用を適正に行い、利用目的が終了し、保管の必要のない個人情報は、随時、裁断処理または焼却処分した。
 ・職員のパソコンには、パスワードを設定し、定期的にパスワードを変更するとともに、館外への持ち出しは原則禁止としている。また、USB等は自宅に持ち帰らないことを徹底させている。
 ・令和元年度中の美術館に関する開示請求はなかった。

2)建物や施設の管理
 ・当館の施設・設備は、建築後25年余りが経過し、老朽化していることから、県で対応する大規模改修、特に平成29年度末から始まったホール及び展示室の吊り天井耐震工事と連動させた改修・更新の年次計画を策定している。この年次計画をもとに、経年劣化した設備の更新を計画的に進めるとともに日常的な点検で発見した危険個所の修繕を迅速かつ効果的に行った。(修繕件数:40件、5,976千円)
 ・施設の適切な管理運営のため、専門の技術者等を擁する民間会社に業務を委託した。(委託件数:23件、77,287千円)

3)危機管理
 ・館職員で構成する危機管理部会において「BCP計画」や「危機管理マニュアル」や「消防計画」等の改定作業を進めた。また、専門家(防災士)の指導・助言を得ながら、災害訓練を実施した。
 ・職員通用口等で入館者の出入りを管理し、不審者の侵入を防止した。また、搬入口の2重シャッター(内・外)は、搬入口使用マニュアルに沿って、職員の許可を得て開閉することとし、不審者の侵入防止と、外気、風雨の侵入抑制を図った。

評価	理由
B	職員や委託先などに関係法令が徹底されており、各法令に基づいて、適正な管理運営体制がとられている。

評価項目	
(2) 利用者サービスの維持向上	・利用者の意見の反映 自己点検、評価の状況 ・事故、クレームへの対応 ・職員の専門性の向上 ・研修の実施状況 ・その他サービス向上の取り組み

状況説明
<p>1)利用者の意見の反映</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主事業の内容や年間の組み合わせ等は、利用者の多様な意見も勘案しながら、長期的な視点で、総合的、計画的に決定している。 ・施設や設備のハード面での意見等については、緊急性や必要性を検討のうえ対応しており、令和元年度は屋根付き駐輪場の増設、災害対応型の自動販売機の導入等を行った。 ・日常の運営に関するソフト面での意見等については、速やかに組織内で共有し、各課職員で構成するサービス部会等で協議のうえ、順次対応した。 <p>2)自己点検・評価の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来館者の満足度を把握するために、企画展やホール事業ごとのアンケート調査に加え、サービス全般のニーズを常時間く据え置き型のアンケートを実施している。 ・これらのアンケートについては、職員全員で回覧するとともに、必要に応じてレストランや貸館の主催者にも伝達し、改善策を検討いただいている。 ・サービス部会を定期的で開催し、日々の業務やアンケート等から得られた利用者のニーズや課題への対策を検討・協議し、館会議や補佐会等に諮りながら実施に移した。 <p>3)事故、クレームへの対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日々寄せられるクレーム、要望等については、必要に応じて上司とも相談して速やかに対応するとともに、その状況を朝礼等で報告した。 <p>4)職員の専門性の向上・研修の実施状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な機会をとらえて積極的に職員を参加させるとともに、新採職員については、3年計画でOJT研修を進め、資質の向上に努めた。 中四国地域アートマネジメント研修会(1名)、 財団研修(学芸員専門 8名、自主企画 2名、避難訓練 3名) <p>5)その他サービス向上の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主催の展覧会ごとに、受付スタッフをはじめ職員向けのギャラリートークを実施し、職員全体の展示作品や作家に対する知識の習得を図った。

評価	理由
B	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの要望について、可能な範囲で要望に対応する努力をしている。 ・サービス部会を開催し、サービスの向上を図るとともに、職員の専門性やスキルアップを図るため外部研修等も活用しながら積極的に取り組んでいる。

評価項目		
(3)利用実績	利用実績の状況	・利用状況の分析

状 況 説 明
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会観覧者数 16,865 人(常設展 839 人、企画展 16,026 人) ・美術館事業の総利用者数 89,957 人 <p>2)利用状況の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和元年度は、展示室及びエントランスの吊り天井改修工事のため、4月から12月まで展示棟が長期休館となったことから、この機会をとらえて、作品の調査や修復に加え、資料の整理、データベース化などを集中的、計画的に行うとともに、県内の市町村美術館と連携して、当館のコレクションを各地域で紹介する出張プロジェクトを開催した。 ・第4期指定管理期間(令和元～5年度)は、展覧会の総観覧者数を5年間で21万人(うち、令和元年度は長期休館する影響等も考慮して1万人)を目標人数(要求水準)として設定されており、令和元年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館や外出自粛による影響もみられたが、要求水準は達成できた。(達成率:展覧会事業 168.6%)

評価	理由
A	・吊り天井改修工事に伴う休館や新型コロナウイルス感染症による影響にも関わらず、観覧者目標を達成したほか、「出張プロジェクト」により地域への展開を行うことができた。

評価項目		
(4)収支の状況	経営努力	・収入増加の取り組み ・経費削減の取り組み

状況説明
<p>1)収入増加の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上質な企画展やホール公演を導入するため、日頃から国内外関係団体や関係者との連携を強化するとともに、見本市や展覧会の視察等も積極的に行い、情報収集に努めた。 ・開催にあたっては、数年に亘って入念に計画・準備し、当館の意向も十分に反映した質の高いものを提供している。 ・広報部会を毎月開催し、広報全般の展開を検証し、改善するとともに、個々の展覧会やホール事業ごとに開催する広報会議などで、それぞれの特徴、特性を活かした広報を検討し、実施した。 ・展覧会を中心に、テレビや新聞の年代層に応じた活用、さらにはフェイスブックやツイッター等SNSによる情報発信に積極的に取り組んだ。 ・広報の一環として、他の文化施設や企業と連携した利用料の一部減免や、タウン誌への招待券提供により、効果的な誘客につなげた。 ・実施する事業の内容の充実を図り、ホール事業を中心に国などの助成団体から外部資金の獲得を積極的に図った。 文化庁、(独)日本芸術文化振興会 計2団体 総額 7,984 千円 <p>2)経費削減の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事務スペースでの省エネ・省資源の徹底、また、委託事業者間の空調運転及び照明点灯に関する連絡調整を徹底させ、省エネを進めた。 ・輪転機を活用したチラシ作製や、県と四国銀行等との連携協定を活用した県内外へのPRの実施など、継続的な経費縮減に取り組んでいる。 <p>3)収支の状況</p> <p>新型コロナウイルスの影響から、展覧会入場者の減や施設利用の中止などがあり、観覧料や使用料などの収入が予算額に達しなかったが、支出における経費の削減や事業安定特定資産の取り崩し等により事業活動収支を均衡させた。</p>

評価	理由
B	・コロナウイルス感染症の影響により、収入減となったものの、外部資金の積極的な導入など収入源の多様化、安定化を図っており、経費削減の努力も認められる。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・吊り天井改修工事に伴う休館中は、調査研究や資料整理等に集中的に取り組んだほか、地域の美術館との連携事業を行うなど、機会を活かした活動ができています。 ・企画展や公演と連動した講演会、ワークショップなどの関連イベントの開催により、多角的、多面的な理解を促進する取り組みが行われている。 ・アーティスト・イン・レジデンス事業では、アーティストと県民の交流を促進することができている。 ・教育普及活動では、スクールプログラムを継続して行っている。 ・ツイッター、フェイスブック、インスタグラムなどのソーシャルメディアも活用して効果的な情報発信ができています。 <p>上記のとおり、優れた管理運営・事業の遂行がなされたものと認められる。</p>

評価基準

- 「A」 要求水準を上回る成果があり、優れた管理運営・事業の遂行がされた。
- 「B」 概ね要求水準どおりであり、適正な管理運営・事業の遂行がされた。
- 「C」 要求水準に達しない面があり、改善のための工夫や努力が必要。
- 「D」 管理運営・事業の遂行が適正に行われたとはいえ、大いに改善を要する。